

史遊会通信

No.225号
平成25年
11月13日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

十月講演要旨

飲酒の歴史と飲酒の今日の問題

漆原直子

お酒は私達の生活には欠かせない物となっておりますが、そのお酒＝アルコールとは何か？その歴史と、今日における問題についてお話しします。

I お酒とは……？

「お酒」の語源は、『古事記仲哀天皇条』では、酒を「ミキ(御酒又は美岐)」又は「クシ(久志)」とよび、少名御神がもたらしたとしている。「サ」は接頭語で、「ケ」は酒を表す「ミキ」の「キ」が変化した物とされます。

“アルコール＝alcohol”は英語だが、その語源はアラビア語のアル＝クフル(al-kuhul)に由来する。「al-」はアラビア語の定冠詞で、「kuhul」は、女性がアイシヤドーに用いた黒粉で、鉱物から採ったアンチモンの粉末(コール墨)のことである。蒸留により生みだされた「精製物」を意味する。世界には様々な酒があるが、酒の種類別に分類すると、次の3つに分けられる。

①醸造酒：酵母による糖分の分解、「アルコール発酵」により、エタノールと二酸化炭素

例会のお知らせ

◎ 十一月例会

日時 平成25年11月27日(水)
午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階
社会教育館 第2研修室
討論会 海舟と諭吉(別記参照)
司会 平山善之

自由執筆 「今年感動した三冊の本」

全員(友の会員も含む)

字数 20字75行を目安に

締切 十一月末日

◎ 十二月忘年会

日時 平成25年12月11日(水)
午後6時～8時

会場 学士会館
会費 六千円

出欠のご返事は十一月二七日まで

が発生する。

② 蒸留酒・醸造酒を蒸留してアルコールの純度を高めた物。

③ 混成酒・蒸留酒等に、ハーブ、スパイス等を混入させた物。

酒税法上の定義・エチルアルコールを1%以上含む飲料を『酒』と規定して、酒税の対象としている。

Ⅱ 人間の歴史と“酒”の歴史

(1) 酒との幸せな出会いの時期…

原始～古代

この時期にあったお酒は、蜂蜜酒(ミード)、果実酒(葡萄酒等)、口噛み酒、ビール、麴による醸造酒、黄酒・馬乳酒等が世界各地で見られる。自然に放置して発酵した場合と、人が口噛み酒のように、が口で噛んだ物を吐きだしてためて発酵させる製法があり、原料として米や小麦、芋、トウモロコシ等がある。また、四大文明と言われるような古代国家が形成されると、国が酒造りを行い、神に仕える巫女たちが口噛みしたことは各文明共通している。

ミードが世界最古のお酒と考えられており、

スペインのアルタミョラ洞窟の壁には、旧石器時代に描かれたとされる蜂蜜採取の様子が描かれている。果実酒としては、日本の縄文時代の土器に、山葡萄のお酒の残渣物が付着していた。ビールの発祥地は古代メソポタミアで、麦芽を発酵させるか、パンを口噛みして作っていた。前3000年頃には『飲むパン』として摂取していた。麴による醸造は中国から始まり、日本には五世紀頃に秦造の祖とされるススコリによりもたらされた。『古事記』には記されている。古代中国の青銅器には、酒器として利用されていたと思われるものが数多く出土している。殷虚では、酒造所と思われる遺構が出土している。『黄酒』という黍、粟、稗、もち米を原料として麴カビで発酵させた酒を作っていた。また、中山国は遊牧民である白狄人が建てた国だが、前四世紀の王墓より出土した壺の中に『乳酒』が残っていた。馬や駱駝の乳から作ったと考えられる。

(2) イスラム世界で発展した蒸留技術…

中世

八世紀のイスラム世界の錬金術から、「蒸留器(アランビク)アラビア語で“汗”という

意味)が発明された。三世紀以降の中国で、不老不死の薬とされる“仙丹”(丹砂と金を調合した物)を作るための“煉丹術”が盛んであった。八世紀にイスラム商人が唐に行き、その煉丹術を錬金術に応用して、「蒸留器」を作った。その結果、多種類の「蒸留酒」が生まれることになった。蒸留酒は「生命の水」と言われた。日本には一七世紀にポルトガル人が南蛮医学とともに伝えている。『アランビク』が訛って『蘭引き(ランビキ)』と呼ばれた。

蒸留酒の種類としては、アラク、ラキ、ウオッカ、ブランデー、ウィスキー等がある。ブランデーは葡萄酒(ワイン)を蒸留した物で、アルコールの度数が高くなった物である。また、修道院ではブランデーに色々な薬草を混ぜて、秘薬を作りだし、それが後に『リキュール』になっていく。

(3) 大航海時代のエネルギー…近世

一六世紀の大航海時代以降に新旧両大陸の酒文化の交流が進み、香辛料や果物が酒と深く関わり、「混成酒」が多様化する。一四九二年のコロンブスによる大西洋横断航路の開発では、長い航海のために、水と食料、船内の

劣悪な環境は大きな問題であった。水は腐りやすく、食料は塩漬けの物ばかりで味気のない物であった。それを緩和するために、飲料水の代わりと気晴らしのために大量のワインが積み込まれた。そのうち、ワインに腐敗を防ぐためにさらにブランデーを加えた。酒精強化ワインを積み込んだ。有名なのが、ポルトガルのマデイラ・ワイン、ポルト・ワインとスペインアンダルシア地方のシェリー酒であった。特にシェリー酒は、海賊の略奪の対象にもなった。アステカ文明を侵略したスペイン人は、インディオ達が作っていたリウウゼツランから作った「プルケ」という醸造酒を蒸留して、「メスカル」という蒸留酒を作った。テキーラ村で作った「メスカル」を「テキーラ」としている。

また、一八世紀になると、ヨーロッパの食卓では、コーヒーや中国のお茶に砂糖を入れる習慣が広がり、それが西インド諸島でのイギリスがサトウキビプランテーションを作り、砂糖の大量生産を引き起こす『食卓革命』と言われる状況を生んだ。この「砂糖プランテーション」のシステムがヨーロッパ資本主義経済の原型になったとされる。砂糖の大量生産の結果、大量のサトウキビの絞り滓(糖蜜)

が出るので、それを発酵蒸留してラム酒を作った。そのラム酒はさらにアフリカで奴隷を買うために船に積み込まれ、奴隷貿易の一翼を担った。さらにこの砂糖プランテーションでは、労働者向けに大量の綿製品を必要とし、イギリスの東インド会社がインドの綿製品を運搬して、爆発的な需要と供給を招き、「産業革命」へと続いて行く。また、お酒の需要も増し、大量生産が始まって行く。

(4) 産業革命と都市化が育てた酒…近代
一九世紀に「連続式蒸留器」が発明され、酒の大量生産が始まる。(それ以前は単式蒸留器のみであった)。産業革命とともに、人口は農村から都市へと流入し、労働者が激増した。しかし、労働者の生活は貧しく、都市の生活は不衛生で悲惨であった。

イギリスでは「ジン」が安価で、貧困層でも簡単に買え、空腹を満たすものとして、また、水が不衛生であったので水に変わるものとして乳児や子供まで飲んだ。「ジン」は一七世紀半ばにオランダの医師によりカリブ海のサトウキビプランテーションに移住するオランダ人のために、薬用酒として作られた。ジンは大麦やライ麦等を混ぜ合わせ、麦芽を加

えて発酵させたものに利尿、健胃、解熱等の薬理作用のある「ネズの実(ジュニヴァー・ベリー)」を加えて蒸留させたものである。

フランスでは、一八世紀末に一人の医師がニガヨモギ(学名アルテミスシア・アブサンチューム)等の十五種類のハーブを混ぜ合わせて発酵させて作った緑色の美しい酒である。アルコール度数が六五〜七九度と極めて強く、アフリカの植民地にいたフランス陸軍解熱剤や消毒薬として多用した。値段も安く、多くの芸術家たちに愛飲された。しかし、この酒は常飲し続けることで、アルコールそのものの作用だけではなく、ニガヨモギに含まれる「ツヨン」というマリファナに似た物質により、幻覚や錯乱状態が引き起こされた。詩人のヴェルレーヌや画家のゴッホやロートレックは、このアブサン中毒で悲惨な生涯を閉じたとされる。このアブサンは第一次世界大戦の時にフランスをはじめ各国で製造販売流通が禁止されたが、近年ツヨンの濃度の規定を設けて製造が許可されている。

(5) 前世紀前半の酒をめぐる抗争…現代
二〇世紀になり、旧大陸で起きた第一次世界大戦は、戦場と化したヨーロッパを没落させ、「新大陸」の移民の国、『アメリカ合衆国

の時代』を迎えることになった。大衆消費社会を生んだアメリカは、一九一九年に『全国禁酒法』を連邦議会で採決した。この法律ではアルコール度数〇・五%以上の酒類の飲酒、製造、運搬、販売を禁止した。暗黒街のボス、アル・カポネが暗躍した時代である。酒の密造やめぐり酒場が発生し、その利権をめぐるのギャング同士、警察やFBIからの取り締まり、逆に賄賂等の汚職など、熾烈な抗争が起きた。禁酒法制定前にはニューヨークにあった酒場は一万五千軒であったが、施行後は三万五千軒の「めぐり酒場」ができたという。この法律は世界恐慌後の一九三三年に、ルーズヴェルト大統領により廃止された。

二〇世紀以降は、複数の酒とジュース、果物等を組み合わせる「カクテル」が生まれ、種類も多様化、酒文化のグローバル化が起きている。

Ⅲ お酒の今日的問題… 世界的なアルコール問題への地球的対策へ

アルコール関連問題は世界的な規模で起きており、WHOを始め世界各国でアルコール関連問題対策が講じられている。

日本では、アルコールの総消費量は漸減しているが(日本酒がこの四十年位の間に消費量が三分の一に減り、焼酎は倍以上増えている)、アルコール依存症と診断されている人は約八〇万人、その疑いがあるとされている人は約四四〇万人いると推計されている。また、一日に純アルコールを六十g以上(ビール中ビン三本)摂取する大量飲酒者は、約八六〇万人いるとされる。

アルコールは口から胃に入ると、胃でその約二十%が、小腸で約八十%が吸収されて肝臓に運ばれる。肝臓でアルコール脱水素酵素(Acetaldehyde)の働きでアセトアルデヒド(顔が赤くなる、吐き気、頭痛等酔いの不快な症状をもたらす物質で、発がん性があるとされる)となり、さらにアルデヒド脱水素酵素(ALDH1/ALDH2)で酢酸に分解されて、血液を通じて筋肉や脂肪組織に運ばれて水と二酸化炭素に分解されて体外へ排出される。口から入ったアルコールの二〜一〇%は、そのまま分解されずに呼吸、尿、汗となって体外に排出される。『酔い』とは、アルコールにより大脳皮質の理性の働きを麻痺させるので、その人の本能が現れることである。

日本人の約四〇%は遺伝的に、アセトアル

デヒド脱水素酵素(ALDH2)が酵素活性を持つていないという。いわゆる『下戸』と言われる人たちである。アルコールが体外に排出されるまでの時間は個人差や男女差があるが、体重六〇kgの人が1単位(純アルコールにして一〇gの量の事)のお酒を三〇分以内で飲んだ場合、三〜四時間かかる。アルコール度数一五度の日本酒一合を飲んだとすると、アルコールは2単位なので、六〜七時間かかる。

アルコールは飲み過ぎると、心身の健康を損なうだけでなく、家族や仕事へのマイナス影響、暴力や飲酒運転による事故といった社会問題を引き起こすことがある。アルコール依存症と医師から診断された人で、そのまま飲酒をやめなかった場合、平均寿命は五十代前半と短い。

お酒をこの世からなくすることはできない。いかに自分の健康を守り、他人を傷つけないで用いるかということになる。WHO(世界保健機構)では二〇一〇年に、『アルコールの有害な使用を低減するための世界戦略』を総会決議した。そこでは戦略目標として、『二〇二〇年までにアルコール有害使用を一〇%低減する』グローバル・アクションプランを策

定した。日本でも、『アルコール健康障害対策基本法』の法案を制定する動きが起きている。近々国会に提出されるようである。要はその一方で、国の内閣府国家戦略室では、『ENJOY JAPANESE KOKUSHU (國酒を楽しもう)』という、日本酒と焼酎を海外に売り込もうというプロジェクトがある。日本の文化を海外に知らしめるとともに、アルコールの販売経路を広げたいという思惑もあると思われる。今後この二つの政策がどう相俟っていくのか見物である。

【参考文献】

- ・『知っておきたい「酒」の世界史』 宮崎正勝著 角川文庫
- ・『黄土に生まれた酒―中国酒、その技術と歴史』 花井四朗著 東方選書

(了)

〔補足〕

この度、史遊会の場で初めて発表し、緊張しました。自分では常に聴講生のつもりでいましたので、何をどうお話しすればよいかと考

えあぐねました。普段口にしないうような言葉も使わねばならず、私がこんなことを話しているのだからかと思いつつ、発表させて頂きました。その後で発表の内容が「お酒」のマイナス面が強調されているような印象であつたこと、また、お酒の効用としての『Jカーブ効果』についてのご指摘がありました。そこで、お酒のプラス面についても少し補足させて頂きたいと思います。

お酒のプラス面は、緊張がほぐれたり、初対面の人とも打ち解け易くなります。私も、量を多くは飲みませんが、美味しいお酒を求めて、ちよつとずつ色々な種類のお酒を飲んでみたいと思つている方です。さらにそのお酒の歴史を考えながら飲めば、特にジンとかラム等、より味わいが深まると思われまふ。また、「お酒」は今回発表しましたように、何よりも、文明の発

展の原動力の一つになってきました。世界の民族の文化形成に寄与しており、「酒から見た人間の歴史」というのも大変興味深い視点だと思ひました。次に『Jカーブ効果』についてですが、こ

図1. アルコール消費と生活習慣病等のリスク



例: 高血圧、高脂血症、脳出血、乳癌

例: 肝硬変

例: 虚血性心疾患、脳梗塞、2型糖尿病

れに關しては過去にどこかで習った記憶があり、その記憶をたどりながら、再度調べてみました。厚生労働省のHPの「e-ヘルスネット」を参考にします。

図1のグラフは、飲酒量と生活習慣病になるリスクとの相関関係を疫学的調査に基づいて現わした相関図のパターンを現わしたものです。グラフ(c)が『Jカーブ』です。虚血性心疾患、脳梗塞、2型糖尿病等の場合は、殆ど飲酒しない人とある量を飲んでいる人と比べると、後者の方がそれらの疾患に罹るリスクが低くなります。が、ただ、それ以上飲めばリスクはどんどん高まります。このことは死亡率で見た時も同様の『Jカーブ』を描いています。このある量というのは、どの位かという、男女とも一日平均二三割未満(日本酒一合未満)で最もリスクが低くなるようです。厚生労働省が提唱している『健康日本21』では、「節度ある適度な飲酒量」として、純アルコールで男性は一日平均二〇割程度、女性は二〇割以下を提示しています。

これぞまさに、「酒は百薬の長！」と言い切りたい所ですが、実はその格言には続きがあり、「されど万病の元」となっています。

この『Jカーブ』関係が認められるのは、先進国の中年男女とされ、(a)(b)のグラフのように直線的または徐々に高まりながら急激にリスクが上がる疾患もあります。また若年者の死亡については、ほぼ直線関係になるという研究結果もあるそうです。

お酒は、諸手を挙げて「良い」とは言い切れず、かといって「悪い」とも言えない、二律背反的な存在です。世の中には、お酒を飲んではいけない人、飲酒量を減らさないといけない人、元々ほどほどしか飲まないで現状のままが良い人、全く受け付けられない人と、四つのパターンがあると思います。お酒その物に罪は無く、『適材適所』という言葉があるように、『適酒適人』であって欲しいと思う次第です。

結局こうして補足しても、すみません、お酒のプラス面のフォローにはあまりならなかったかもしれません……。

(了)

自由執筆

秀吉のバテレン追放令

鍋屋 次郎

バテレン追放令は一五八七(天正十五)年六月十九日夜、突如として秀吉から発せられた。

その七時間前まで秀吉は、ポルトガルのフェスタ船(小型武装船)に自ら乗り込んで隅々まで見渡したのち、船の中にいたバテレン(宣教師)たちとも歓談し、下船した後バテレンの準管区長コエリヨに対し、「キリシタン寺院設用地として博多の町で最もよい場所を与えらる」と喜ばせていた。

秀吉と別れてフェスタ船に戻ったバテレンたちは、博多の一等地に教会建設の目処がついたことと、それにより秀吉のバックアップで更に活気ある宣教の期待が持てたことに祝杯を挙げていた。

ところがその夜八時頃、博多湾上に停泊していた、コエリヨが乗っているフェスタ船に

秀吉からの命令書が届いた。たまたま日本の文字に明るいフロイスがいたので、その命令書をコエリヨに読んで聞かせた。内容要旨は

一、日本は神国である。それにも関わらず神社仏閣を破壊することは許せない。

二、バテレンは馬を食べる。馬は農作業に必要な動物であり、食べることは罷りならない。

三、バテレンの教えは日本にとっては邪法であり、今後それを弘めることは罷りならない。

四、バテレンは二十日以内に日本を退去せよ。

と言ったものであり、コエリヨは秀吉の豹変が理解できず、自ら秀吉の真意の確認に小西行長の陣営に向かった。

島津を臣従させた秀吉は博多に凱旋し、管崎宮を本陣として、従軍した諸大名の陣営は管崎宮から二里以内の寺に分散させていた。

バテレン追放命令と共に、高山右近の所へは「キリシタン棄教命令」が来たが、右近は

切腹覚悟でこれを拒否する回答を秀吉の使いに持たせた。

何故秀吉は豹変したのか。日本統一の夢を後一步のところまで進めてきた秀吉は、九州平定が終わった後に小田原北条氏の征伐を予定し、まだ、秀吉に臣従していない伊達正宗の動向次第では、長期戦を覚悟する必要があった。そのような事情を抱えていた秀吉は、

島津征伐で高山・大友・大村・有馬などのキリシタン大名の勇猛果敢な攻撃と、合間に見せるキリシタン大名間の親兄弟間を超えると思わせる親密さを目の当たりにした。その上に博多に凱旋してから、ポルトガルの小型武装船フェスタ船内を隅々まで見た秀吉は、この船は戦用の武装船である、と確信した。

秀吉は、小田原征伐が長期に渡った場合、バテレンがキリシタン大名を結束させ、小型武装船で海から支援し、マカオからポルトガル、またはスペインの軍隊が九州にやって来たら日本はどうなるのか。キリシタンの世界では一番偉いのはデウス（キリスト教の神）であり、秀吉ではない。バテレンは何故武装

船を持ってきているのか。キリシタンの布教と言っているものの、衣の下には鎧が隠されているのではないか、と思い込んだ。

そこでその憂いをなくすためには、バテレンの国外追放と、キリシタン大名のリーダー格である高山右近にキリシタン信仰を棄教させることだと考えた。

管崎宮で秀吉の側についている施薬院全宗は大のキリシタン嫌いであり、秀吉の漏らしたこの考えには大賛成であった。

この時代、フィリピンでもインドでも秀吉の憂いが事実となっていることを考えると、これは憂いではなく、根本的に対処すべき問題と考える。

その後、一六一三（慶長十八年）年十二月に家康はバテレン追放令を発し、その後二百年間の鎖国の基礎を作った。日本がスペインやポルトガルの植民地化から免れたのは、バテレン追放に始まる鎖国政策によるものと考えるのは私だけであろうか。

自由執筆

『古墳が語る』

呪縛された歴史学

古代史の「虚」を読んで

中山 喬央 たか ひろ

このタイトルを読んで、すぐお分りになられた方もおいでになられると思うが、かつて本会に在籍された、相原精次さんが、今年七月、彩流社より刊行された近著である。

読後、私は正岡子規の『歌よみに与ふる書』を思い出した。

「定家という人は上手か下手か訳の分らぬ人にて、新古今の撰定を見れば少しは訳の分つてゐるのかと思へば、自分の歌にはろくな者無之く定家を狩野派の画師に比すれば探幽と善く相似たるかと存候。定家に傑作なく探幽にも傑作なし。しかし定家も探幽も相当に練磨の力はありて如何なる場合にもかなりにやりこなし申候。両人の名譽は相如くほどの位置において、定家以後歌の門閥を生じ、探幽以後画の門閥を生じ、両家とも門閥を生じた後は歌も画も全く腐敗致候。いつの代如何なる技芸にても歌の格、画の格などといふやうな格がきまつたら最早進歩致す間敷候。」である。

浜田耕作はゴースト死亡の際、追悼文を寄せているのであるが「古墳文化が渡来したものである」とのゴーストの明確な表現を削って「自発的に国内で発達し」と言いかえ、論のすりかえをした。一方、齋藤忠は『年表で見る日本の発掘・発見史①』において、モースの大森貝塚は掲載したが、ゴーストについては全く触れず、彼の意見を抹殺した。この両学会長老の意向を付度した明治大学博物館で行なわれた「ガウランドー日本考古学の父」と、昨年NHKが放映した「巨大古墳の謎」は全く進歩が見られないと述べている。

相原さんは皆さんも良く御存知の通り、永年に亘り関西と関東の名門高校で国語の教師をされた方で、先ず神奈川県古墳を实地に探查され、その後関東・東北と其の活動の範囲を広げられたうえで、日本史における「古墳時代」と言う時代区分が実際に存在している古墳の分布状況とは全くかけ離れていることに気がつかれ、たまたま目にされたガウランドの著書に興味を持たれ、この本の刊行の運びとなったものである。

学閥に属さず予見のない筆者が実際に現地を訪問され、或いは実際に訪問された友人及び学識経験者の発表・情報に基く曇りの無い観察

眼から来る、全世界的な古墳論は読者を飽きさせないもので、センセーショナルな題名と違つて冷静に論を進められており、名著であると考える。

相原さんのお考えは、ゴースト自身の『日本古墳文化論』のなかの

……日本古代の記録によれば、大和は初期における中央政府の所在地であったという。その支配者たちの首長は天皇の称号を持ち、全国をおおう最高権威を有するものとされた。しかしこれはドルメン時代前半に限る限り、議論の余地は十分ある。……これらの他地域のドルメン出土の遺物の方が、歴代朝廷があつた大和圏出土の副葬品よりも、もつとすばらしい富と偉大さを示している。むろん、大和の支配者たちは、その後、これら他地域の上にも支配力を及ぼしたが、それはドルメン時代はかなり期間が経過した後である。……を現実に見合つたものとしており同感できる。

最終頁には埼玉県若小玉古墳群の八幡塚古墳石室の外形写真と、アイルランド最大の円形古墳「ニューグレンジ」の石室構造の図が掲載され、相似性を読者に訴えている。

自由執筆

カメルーン、駐在後四十年

太田精一

日本が主導するTICAD（アフリカ開発会議）が、本年六月一日から三日間、横浜で開催された。五年振りである。会議にちなんでアフリカ展が催され、横浜「みなとみらい」の会場は、アフリカ一色に包まれていた。

私は、若き日の想い出を求めて、展示会場を訪ねてみた。

むせ返るようなアフリカの熱気が会場を包んでいる。久しぶりで味わうその雰囲気が高揚した私は、会場の一小間、一小間を丁寧に見て回った。

家族を伴って西アフリカのカメルーンに赴任してからすでに四十年が過ぎている。

私は、ジェトロの駐在員としてカメルーンを拠点に、旧仏領ブラツクアフリカ諸国の経済、貿易、投資環境などの調査と日本製品の市場開拓を進めるため活動した。

カメルーンは、西アフリカの中央部にあって、旧仏領ブラツクアフリカ諸国を巡回し、調査するには最も便利な位置にある。

面積は日本の一・三倍で、人口も旧仏領ブラツクアフリカ諸国の中では比較的多く、経済規模も大きい。民度が高く、治安も良いため、生活環境にも恵まれていた。

通貨は、旧仏領ブラツクアフリカ共通のCFAフランである。フランス政府は、この通貨を当時、五十対一の割合で保証していた。言い換えれば、一フランスフランが、五十CFAフランと等価で、CFAフランはフランスを始め、ヨーロッパ諸国で各国通貨に交換することが出来たのである。

（フランスのEU加盟によって、現在では、ユーロとリンクしている。ちなみに本年十月現在、一ユーロ＝六五・九五七CFA）

また、熱帯雨林帯からサバンナの乾燥地帯まで気候は変化に富み、多様な人種、民族が共存している。南にはバンツー系の黒人。北には、サハラ周辺に住む彫の深い顔立ちのフルベ族、ハムの系統を引くエチオピア系の住民。それぞれ伝統的な生活様式を守って暮らしていた。

当時のカメルーンは、独立後十二年しか経っていなかったため、近代国家としてのシステムが不備であり、人材も不足していた。フランス人の国家顧問が、政府の各部署に配属されていて、指導に当たっていた。

そんなカメルーンも四十年後の今日、ずいぶん変わってきている。

人口は、私の駐在していた一九七二～五年当時の六百万人から二千万人に、一人当たりのGDPも二百ドルから千ドルへと上昇した。当時石油の産出は、微量であったが、その後開発が進み、二〇一一年には、十七億ドルの輸出額を記録している。

だが、対日経済関係は、進展していない。

一九七四年のカメルーンの対日輸出は、千四百万ドル、輸入は一千万ドルで、貿易相手国別では、それぞれ輸出で九位、輸入で八位を占めていた。それが、二〇一一年には、輸出四百三十万ドル、輸入三千四百七十万ドルで、対日輸入は、三・五倍となっているが、輸出は、三分の一に落ち込んでいる。

貿易総額に占める対日貿易の比率は、一九七四年の二・六四パーセントから実に〇・三四パーセントに低下した。

それに比べ対中輸出は、一九七四年当時はほとんど皆無で、輸入が千五十万ドル程度であった。

ところが、二〇一一年には、対中輸出は、五億千六百万ドルとスペインに次いで二位に躍進し、輸入も六億六千九百万ドルと三位となっ

ている。

貿易額一つとってみても中国の進出がいかに大きいかがい知ることが出来る。

現在、カメルーンへの日本の進出企業は、皆無で、現地での生産活動は行われていない。

一九七二、三年頃には、三井物産と大東カカオの合弁によるソカカオ社が、ココアバターの生産を行っていた。ところが、カメルーン化によって、政府が同企業を買収、日本勢は撤退した。現在も政府系企業として事業は、続けられているという。

残されたフロンティア大陸として今アフリカは注目されている。長い眠りから覚めようとしている。

カメルーンも例外ではない。人口も著しく増加し、国民一人当たりの生活も向上している。かつて私が、同国に駐在していた頃は、中国も韓国も経済、貿易、投資の情報を求めてジェトロ・ドアラ事務所に立ち寄った。今は、中国に大きく水をあけられてしまった。日本の失われた二十年は、アフリカに持つわが国の橋頭堡を奪い去った。

豊かな資源と豊富な人材に恵まれたカメルーンの未来は明るい。日本からの積極的な投資が求められている。その要求に応えることが、

同国を豊かにし、アフリカの成長を支え、ひいては国際社会における日本の存在感を高めることにもなるのである。

自由執筆

海舟の父・旗本勝小吉の出目と生涯

諸橋 奏

幕末・明治の大政治家、勝義邦（通称麟太郎・号海舟）の人物・業績については今更記すこともない程周知されている。

前坂俊之『世界が尊敬した日本人』によれば、山本七平は「日本最大の英雄で、全世界を通じて百年に一人も出ない天才」と激賞。明治四年に来日の米国人E・W・クラークは『カツ・アワー』日本のビスマルク』のなかで「海舟の忍耐、勇氣、覚悟、指導者の注意深さは神に近い」とまで絶賛しているという。

一方、その父小吉については「本所の旗本勝小吉は貧しい極道者」と紹介している。本人もまた自叙伝『夢酔独言』——幼少年のころ——で「おれほどの馬鹿な者は世の中にあんまり有るまいとおもう（中略）能々（よくよく）不法もの、

馬鹿者……。おれは妾の子で……。」さらに——生涯をかえりみて——で「無法の馬鹿な事をして（中略）四十二になって、始めて人輪（倫）の道（中略）仁愛の道を少ししたら、是れ崙の所行がおそろしくなった。」と結語している。

小吉について、勝海舟生誕の地（現両国公園内・所在地墨田区両国四丁目二十五番）の区教育委員会記文は「勝海舟は、文政六年（一八二三）正月三十日、ここにあった男谷精一郎の屋敷で生まれました。父惟寅（小吉）は男谷忠恕（幕府勘定組頭）の三男で、文化五年（一八〇八）七歳のとき勝元良に養子入りし、文政二年に元良の娘のぶと結婚、男谷邸内に新居を構えました」と記す。補足すると、男谷精一郎は小吉の長兄旗本男谷彦四郎恩孝（ひろたか）の養子。旗本勝甚三郎元良（禄高四一石）没後勝家は祖母と孫娘（信・のぶ）だけだったので旗本男谷平蔵忠恕（ただひろ）が二人を引き取っていた。海舟の父「勝小吉」は男谷忠恕の三男であった男谷惟寅の養子後の名前。

ところで小吉の父男谷忠恕は、盲人では最上級の官名「檢校」をもつ男谷檢校の九男で、忠恕は父の檢校に安永五年（一七七六）頃、直参の株を買ってもらったようである。男谷家、勝家の繁栄の元は男谷檢校にありといつて過言

ではあるまい。

男谷検校は勝小吉の祖父・海舟の曾祖父で、本名山上銀一。元禄一四年（一七〇一）越後国刈羽郡長鳥村平沢（現柏崎市東長鳥）山上徳左衛門の七男に生まれた。一二、三歳の頃盲目となり、按摩の修業に励んだが、その秀才ぶりを同輩に妬まれ、些細な事件で盗人扱いされて父に勘当され、一本の杖を頼りに江戸に出府した。江戸で更に鍼術を修業し、元文四年（一七三九）三八歳で七三段階があつた盲目最高官位の「検校」となつた。当初は米山検校といつたが、後に男谷検校と改めた。優秀な鍼術と卓越した人柄で大名や上流階層に信頼を得て、金貸業で財をなした。而も本人は質素、儉約を守り、社会福祉、困窮者対策にも積極的な生涯を送り、故郷でも尊敬され、明和八年（一七七二）七〇歳で没した。

小吉については前述の如く無頼の徒との世評が定着しているようであるが『夢酔独言』を精読すると若干修正すべきかと思う。

確かに小吉の幼少時から半生の行状は凄しい。五歳で喧嘩相手に傷害を負わせ、七歳で喧嘩に負けて切腹騒ぎを起したのを始めとして、親父（男谷忠恕）と長兄（男谷彦四郎）以外に恐いものなしの我儘放題。幼少年期は家庭環境

の成せる業があつたのであろう。ついには家人の金を盗んで上方へ向けて出奔する。一四歳の時であつた。約四ヶ月乞食をして食いつなぎ、途中大病をして人の情に助けられたりの放浪生活の末に帰宅している。その後も乱れた生活は止まらなかつた。

一七、八の頃、ふとしたきっかけで剣術を学び、喧嘩が他流試合に変つたことは、世間にはルールやマナーがあることを知つたはじまりだつたようだ。

文政二年（一八一九）一八歳で、信（のぶ）と所帯を持つが又々借金が増え、人生の壁に突き当たり、再度江戸を出奔、帰府するや父に座敷牢に入れられて反省、手習や読書に励む。

文政六年、長男麟太郎（海舟）が生まれ、小吉も人の子の親になる。自分勝手が通じないこの世の為来（しきたり）が分つてきた頃、老師から「怨を恩で返す人間になれ」との訓を得て実行に移す生活に変わる。二四歳の時であつた。以後、世間、家族の信頼を徐々に得るようになった。文政一〇年の父平蔵の急逝にも大いに感ずるところがあつたのであろう。

ところで、小吉の人生での最大事件は、天保二年（一八三一）小吉三〇、海舟九歳の時。海舟が野犬に牽丸を噛まれ、重傷を負つたことで

ある。小吉は息子海舟の平癒を祈り、金比羅（地の語り伝えでは能勢妙見）に毎日水垢離（みずごり）をしたとのエピソードが今に伝わっている。とはいえ、小吉の三〇代は善悪交々の「三つ児の魂百まで」だつたようで、相変らずの借金、喧嘩、放浪と不行跡は絶えず、兄彦四郎に厳しく諫められ、天保一〇年（一八三九）小吉三八歳（海舟一七歳）で隠居、夢酔を号とした。この年祖母が没し、翌年には兄彦四郎も病没。四〇歳になつた小吉も大病を患う。四二歳、鶯谷に庵を結び、『夢酔独言』を著した。嘉永三年（一八五〇）小吉四九歳、波乱の生涯を閉じ、牛込赤城下清隆寺に葬らる。ときに海舟二八歳、蘭学と西洋兵式の私塾を開いた年であつた。

翻つて小吉の生涯をみると「子を見れば親がわかる」の譬喩に依るとすれば、海舟を知るクラークをして「彼以上にクリストの人格を備えた人を見たことがない」とまで言わしめた子の親小吉は「此の父有りて斯に此の子有り」だつたと言えるのではあるまいか？

海舟が野犬にかまれ危篤になつたのは、九歳の時である。

人間の能力形成には臨界期があるといわれる。能力別形成年齢は九歳で「感覚能力（五感・視・聴・味・嗅・触）」は一〇〇パーセント、

「運動能力」「情緒能力(喜怒哀楽の情)」「社会能力(対人関係||自主能力)」は九〇パーセント【刷り込み】が出来上がるという。とすると海舟が犬にかまれた事件と小吉のその時の行動などは海舟の人間形成にかなりの影響を及ぼしたと窺い知るのである。それとも父小吉の存在そのものが、海舟の反面教師だったのであろうか。

※ 会員の活動 新井宏氏

連続講演全五回 主催【トンボの眼】

「理系の視点から見た考古学の論争点」

各回時間 一時十五分〜三時十五分

申込み <http://www.tonbonome.net/>

第一回 12月17日(火) 豊島区立生活産業プラザ

「弥生時代は五〇〇年遡るか」

第二回 1月7日(火) 豊島区立生活産業プラザ

「楽毅の奪った青銅器のリサイクル」

第三回 1月28日(火) 会場未定

「三角縁神獸鏡はたして魏鏡か」

第四回 2月18日(火) 会場未定

「古韓尺の導出と古墳築造尺度」

第五回 3月4日(火) 会場未定

「弥生時代の製鉄は無かったか」

事務局だより

○ 今月の討論会は「諭吉と海舟」です。

諭吉は明治二十四年冬「瘦我慢の説」を書いて勝、榎本に送りました。その本意はどこにあったのでしょうか。彼の言動と矛盾するところはないのでしょうか。

勝は「行蔵我に存す。毀誉は他人の主張」と、榎本は「昨今別して多忙につき」といずれも相手にしませんでした。もし、まともに応えたとしたら、どう言ったのでしょうか。

十一月討論会は、まず中山氏が諭吉の、大田氏が海舟の代理人としてそれぞれの主張を本人に代わって陳べます。皆さんも大いに自説を語ってください。

○ 早いもので次回は忘年会です。十二月十一日、六時、学士会館にぜひお集まり下さい。出欠のご返事は十一月二十七日までに同封の葉書でお願いします。

平成26年度 史遊会講演者・「史遊会通信」自由執筆者一覧 (敬称略)

講演		「史遊会通信」執筆者					
年月	講演者	No.	発行月	原稿〆切	自由執筆担当者		
1月22日	小田紘一郎	227号	1月	12月末	森下	佐藤	村上
2月26日	鯨 游海	228号	2月	1月末	漆原	平山	鯨
3月26日	隆 恵	229号	3月	2月末	三戸岡	隆	小田
4月23日	鍋屋次郎	230号	4月	3月末	千坂	中込	新井
5月28日	森下征二	231号	5月	4月末	柴田	瀧澤	鍋屋
6月25日	平山善之	232号	6月	5月末	中山	太田	森下
7月23日	佐藤健一	233号	7月	6月末	佐藤	村上	漆原
(8月休会)		234号	8月	7月末	鯨	平山	小田
9月24日	瀧澤 中		(休刊)				
10月22日	中山喬央	235号	10月	9月末	三戸岡	隆	中込
11月26日	(討論会)	236号	11月	10月末	千坂	新井	柴田
12月	(忘年会)	237号	12月	11月末	今年感動した3冊の本(全員)		
1月28日	柴田弘武	236号	1月	12月末	瀧澤	鍋屋	中山
2月25日	新井 宏	239号	2月	1月末	大田	森下	佐藤

- 1、講演者は講演の前月末迄に「要旨(10行程度)」を、当月末迄に「講演録」を編集者まで提出。
- 2、友の会会員の自由執筆投稿を歓迎します。
- 3、自由執筆原稿は20字75行を目処にお願いします、基本的には自由です。